

東北復興日記



169

かつて私と夫は埼玉県で公立中学校の教師をしていました。夫は農家の長男で、十五年前に両親の高齢化をきっかけに早期退職。夫の故郷の福島県西会津町で新規就農し、田舎暮らしを始めました。

退職金でシイタケの菌床栽培のハウスを建ててシイタケとキクラゲを栽培し、各地の商談会やフェアに参加、自ら



キノコハウス代表取締役
佐藤昭子さん



シイタケへの思い胸に再起

販路開拓してきました。九年目には栽培も軌道に乗って法人化。海外取引の商談が決まったのは原発事故の少し前のことでした。

事故後、海外取引だけでなく、東京の高級料亭などの取引も全てキャンセルに。県外から購入したシイタケの菌床から放射能が検出され、シイタケ栽培も断念しなければならなくなりました。悲しくつらい思いをたくさんしました。福島県産ではやっていけないと考え、お隣の新潟県にハウスの移転場所まで決めていた時、義父が他界。自宅で葬儀を済ませた後、なんとな

く義父が「ここにいてほしい」と言っている気がしました。同じころ、内閣府が復興六起という新規事業の立ち上げを支援していることを知りま

した。ここに暮らし続けるためには、新規事業を立ち上げなければ。そう考えていた時、ふっと自宅の縁側でカフェをしたいなあという思いが湧いてきました。申請書を作成してプレゼン。私の起業案は採択されました。原発事故の翌年夏のことです。

初の飲食業です。何とか「縁側カフェ」がオープンしたのは二〇一三年二月。福島県の限界集落、西会津町奥川の交

流人口を増やしたい、海外の方にも来ていただきたい。いろいろな思いを胸にカフェがスタートしました。写真。

十一年取り組んできたキノコへの思いはまだまだあります。屋号の「キノコハウス」はキノコ生産を中止している私たちには、とてもつらいものがあります。今でも時々、キノコをつくっていたときの楽しい思い出がよみがえります。

※縁側カフェは電0241(49)2011。
(東北復興日記は次回から火曜日。最終週を除く。に掲載します)

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「一結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。